
真の聖戦戦争

かのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真の聖戦戦争

【Nコード】

N3859U

【作者名】

かのん

【あらすじ】

6年前、世界各国にある山々が一斉に噴火した。それと同時に世界に悪魔があらわれる。彼らは魔法という特殊な力をもっていた。人々はその容姿に、力に恐怖した。危機を感じた各国の代表は会談を開き悪魔をこの世界から抹消するために同盟という名の組織を作った。

彼らは自分達の世界を守るために悪魔と戦って行く。

しかし、悪魔達は人々の想像している生き物と違っていた。悪魔は人類と共存を望んでいたのだ。

『本当に悪魔は悪者なのか？人間が勝手に想像しているだけで話し合いもしないで一方的に決め付けるのはおかしい！』
そういった考えをもった数少ない人間は悪魔と話し合い共存を選んでいく。そして、共存を選んだ者達と悪魔を敵とみなす国家との戦争が始まる。

初めての試みですので、誤字脱字やら表現方法が幼稚なところもあります。温かい目で見てやってください。

共に生きよう

夢を見ていた…

暗黒の大地とでもいえないのだろうか？

空は黒い雲で覆われ、草や木が生えることない大地。

ひたすら目的もなく風景も変わらない場所を歩いていた。

「……………」

風の音すら聞こえない無音の世界。そこを歩いていた。

「…いつ…に…」

隣に小さな少女と一緒に歩いていた。

「拓也…ずっと…………ね」

少女は微笑んでいた。

色白の肌に青色の髪と青い瞳を持つ少女、その少女を優しく抱しめ頭を撫でていた…

少女は頬を赤らめながらそっと目を瞑った。

「いつかきつと…………」

少女はそう言うと、腕から離れた。

「ああ、いつかきつとな」

俺の声を聞いて少女はにっこりと微笑んだ。

その瞬間に、目の前が少しずつ明るくなり風景が歪んでいく。
歪む風景の中で、少女が何かを叫んでいた。

「わた…まえ…れないで！……のそ…い…から！」

一生懸命何かを叫んでいる彼女に向かって俺はにっこりと微笑んだ。

目が覚めた。

重い身体を起こしてベットから降りる。

何かの夢を見ていたのだろうが思い出せない。

ただ、少し悲しいようなそれでいて暖かくうれしいような気持ちだけが心に残っていた。

さっきみた夢を思いだそうと考えながら身支度をしていると、トン
トン！と、扉を叩く音がした。

「誰だ」

扉に視線を向けると同時に、ベットの横に立て掛けられている銃に
手を伸ばす。

「第3小隊所属、神谷玲香一等兵であります」

その声を聞き銃を手放し、ゆっくりとベットに腰掛けてから入るよう
に促した。

「失礼します」

入ってきたのは黒髪を赤いゴムで束ねた軍服姿の少女だった。

「少尉、お早う御座います。食事の用意ができましたのでご報告に上がりました」

「わかった。すぐいく」

少女は報告が終わると敬礼し、部屋を出て行った。

身支度を終え、机の上にある資料を見ながら戦争になった原因を思い出していた。

6年前に世界各国の山々が連鎖するように噴火し、それと同時に今まで御伽噺でしかなかった悪魔が現れた。

悪魔は人間の住む世界に順応し始めた。

人類は未知の生物に危機感を持ち、各国の代表を集め悪魔対策を始めた。

悪魔と闘うための機関『Devil Genocide Organization（悪魔・抹消・機関）』DGOを作った。通称デイーゴという。

奴らは『魔法』と呼ばれる不可思議な力を持っており、火や水、雷や風などを自在に操ることが出来る。

その力に恐れを抱いた人類は、様々な方法を用いて悪魔を追いやっていった。

ある時、一人の少女が現れた。

悪魔の少女は人間との共存を望んだが、人間は悪魔の圧倒的な力に未知なる力に恐怖して、それを拒んだのだ。

共存という名の植民地にされると思っていたのだ。

突如として現れた見るからに凶悪で人間とは違う容姿、体を持っているため！さらには昔から悪魔は悪という思考があり人間側が勝手に恐怖したのだ。

それを感じとった悪魔が話し合いという譲歩を見せ、さらに見た目も人間のようになり恐怖心を少しでも減らそうと努力してくれていたのだ。

それなのに、人類は悪魔を攻撃してしまったのだ。悪事を働いていないのに…。

その後、人間達は悪魔達の抹殺を開始した。

これにより話し合いがなくなり、人間対悪魔の戦争がはじまったのだ。

『第一次世界聖戦』

そんな中、悪魔と共存しようという者があらわれたのだ！

『本当に悪魔は悪者なのか？人間が勝手に想像しているだけで話し合いもしないで一方的に決め付けるのはおかしい！』

そういった考えをもった数少ない人間は悪魔と話し合った。

彼らは戦争で悪魔に助けられた人々だ。悪魔たちは戦争中も被害に合った街の人々を救助し続けた。

そのため一緒に共存しよう！悪魔のことをちゃんと世界の人々に知ってもらおう！という人たちが次々と名乗り出たのだ。

彼らは共に生きるために組織を作った。

『Let's live with it（共に生きよう）』L・

L（通称：ダブエル）である。

ダブエルは世界各国に行き、戦争で困っている人や貧しい人たちを助けた。

だが、宗教を掲げる団体や国は分かり合おうとしなかったのだ。

しかも、下級悪魔（人間で言う一般兵）を捕獲しそれらを利用し始めたのだ。

ダブエルの活躍も虚しく人類はさらに悪魔達を追いやった！

圧倒的な力『核』により悪魔達は壊滅！人類にも多大な被害がでてしまったが、彼らは正義の名の元に戦争に勝利した余韻でその重大さもわすれてしまっていた。

生き残った悪魔達はちりじりとなり、人気のない森で生息するしか

なかったのだ。

「ディーゴか……」

小さく呟きながら壁に立て掛けてあつた Avtomat Kalashnikova-47（通称：AK-47）アサルトライフルを肩に掛けベレッタ M92（通称：M9）ハンドガンを手ホルダーホルスターにしまい扉を開け食堂に向かった。

食堂は賑わっていた。

入り口で全体を見渡し空いている席を探す。

長方形のテーブルが6つ。

一つのテーブルに12人が座れるようになっている。

席を探している時、一人の少女が大きな声で手を振りながら声を掛けてきた。

「少尉いゝおはようございまゝす。こっち空いてますよゝ」

綺麗な金髪をツインテールにした少女はそう言うと、隣に空いている席をパンパンと叩いてこつちをみながらニコニコしていた。

身長は140cmぐらい、幼い容姿から13、4歳にしかみえない。紅い瞳に栄える黒一色のゴシック服と云えばいいのだろうか、まるで西洋人形のような少女。

彼女の名前はエリル・マジエリ・スクブス。第3小隊所属の軍曹である。

周りのものに挨拶をしながら彼女の隣の席へと座った。

「少尉いは相変わらずお寝坊さんですねえ」

「ベットがなかなか俺の事を離してくれなくてな」

エリルはニコニコしながら足を左右ばらばらにプラプラさせていた。

「少尉、お食事です」

「ありがとうございます」

食卓に朝食が置かれた。食事を持ってきてくれたのは眼鏡を掛けた金髪の青年だ。

身長は175cmぐらいで髪はボサボサだが清潔感がないわけではない。

青い瞳につり上がった目は頭の良さそうなイメージを持たせる。

彼の名前はフィス・ディレイス・アビゴール。第3小隊所属の准尉である。

食事を手にし始めてすぐに辺りが騒がしくなってきた。食堂の入り口で一人の兵が辺りを見渡し、声をあげた。

「伝令。前田拓也少尉はいらっしゃいますか？」

「どした」

声をかけると目の前に伝令書をもった兵が駆け寄って敬礼をする。

「申し上げます。元帥より伝令です！」

言葉と同時に白い封筒を私に渡し、敬礼をした後もどっていった。封を開け、中身を確認した後その場にて声を張り上げる。

「みんな聞け！」

朝のざわめきが一言で静まり返る。

「出勤命令だ！第3小隊は各自準備し、0900に作戦会議室に集合！ここに居ない者には各部屋のリーダーが責任持って伝達すべし！以上」

「『イエッサー！！！！』」

その言葉と同時に食事をしていた第3小隊の者は、各部屋に駆け足で戻っていく！

「フイス！」

「ハッ！」

いつもの気軽な感じではなく、厳しい表情をしながらフイスはこちらに体を向き直し敬礼をする。

「新入隊の者もいる！彼らに必ず注意事項をおしえておけ！人間はずる賢いからな」

「ハッ！ですが、少尉が言々と説得力ないですね」

そういうと彼はニコツと、笑いながら駆け足で会議室に向かった。

「……まったくだ」

食堂はさっきまでとうって変わって静かになっていた。

「少尉いゝ」

「ぶっ！！エリルまだ居たのか？お前も早く向かえ！」

そう言いながら彼女の頭をくしゃくしゃにする。

「うぎゃあ！少尉いゝやめるられえゝ！わけめがあゝ髪がうにやる

らるゝ」

彼女は俺の手を両手で掴み一生懸命抵抗している。

真つ赤な顔をしながらもがく姿をみていると、何故か心が和んでしまふ。

「ほら行け！軍曹が遅れたら下に示しがつかないぞ！」

「わかつてるもん！」

ブクーっとはつぺを膨らませながら食堂を後にするエリルの後姿はとても幼くちよつと力を入れたら壊れてしまふのではないか？

そんな錯覚すら覚える、見た目が子供だからなのか行動が子供だからなのか……

意味もないことを考えていた……。戦場に大人も子供もない！

ただあるのは生きるか死ぬか！それだけである。

「ふー……行くか」

理由：（前書き）

主人公は前田拓也です。35歳前後の少し渋め？を想像して書いています。

理由：

会議室にはいるとそこには50名の第3小隊の面々が綺麗に整列をして待っていた。

彼らの向かい合う形でフィスとエリルが立っていた。

「またせたな」

その言葉と同時にかれらは姿勢をただし、敬礼をする。

第3小隊の参謀役、フィス准将が壁に掛けられた地図を指しながら今回の情報を話し初めた。

現在地から約200kmはなれた森の中にある悪魔だけの小さな村をディーゴが悪魔狩りをするという情報を入手したこと。

そして今回行う任務は、村の防衛および救助であることをつけ、一通りの説明を終えた後、フィスは少尉を見つめ言葉を待っていた。

「そこの新人！」

そう言いながら今日入ったばかりの新人が並ぶ先頭の少年を指した。

「ハッ！」

「我々は、何故悪魔達をアイオンと呼ぶかわかるか？」

その返答にハッキリした声で答えた。

彼らアイオンは人間の道具として使われるために何度も襲われているのにも関わらず、復讐をしないということ。

村を襲われた場合は反撃はするものの、人間を殺すという事を一切しないということ。

そんな彼らは、火山が連鎖反応して噴火した自然現象が擬人化して

神や精霊としてこの世界に降り立ったように思えたからだ。

その時間すら跳躍したような出来事に『アイオン』時間の神から取った名前だ。

この名前には悪魔という呼び名では失礼に値すると考えたダブエルの人間が考えたことだと彼は語った。

「宜しい！では、その後ろ！なぜ、デイーゴは彼らを捕まえる！？」

先ほど答えた後ろの少年が答える。

アイオンの力の源でもある魔法を利用するために彼らを捕まえている事。

彼らの名前がわかれば人間にもその力が使えるということ。

もちろん名前だけではなく彼らが力を貸したいと心から思われたいと使えないという事。

そのため、アイオンを瀕死の状態まで追い込み名前を聞き出し助ける代わりに自分に力を貸すようにしていることなどを語った。

そして今までに捕まった7割以上のアイオンが人間に手を貸さずに亡くなっているという事も…。

「いいか！やつらは聖戦戦争などと正義を掲げているが、どうみても間違っているのはあいつらだ！ましてやこの力を使って人間同士が争う始末だ！バカどもに何が正しいのか教えてやれ！」

「「「おー！ー！ー！」「」「」

会議室の温度が一気に上昇する。

それと同時にフェイスが合図をだし、部隊の移動の為にみなが会議室を後にし車庫に移動していく。

それを見送りながら後ろにある地図を見ていた。

「フェイスはどう思う？」

「はいつ？」

漠然とした質問に戸惑っていたフィスは、少し考えてから少尉に向き直り答える。

「今回のディーゴの動きですが……。妙ですね」

「……おまえもそう思うか？」

「はい」

いつもならディーゴが動きだしたり、村や街が被害を受けている時に情報が入ってくる。

それが、今回はディーゴがまだ動き出していないのに目的の場所の情報を掴んでいるという事だ。

「わざと情報が漏れるようにしたか……。畏だな」

「おそらく……。狙いは少尉でしょうね」

フィスの言う通り、俺は絶えず命を狙われる立場にあった。

それは、6年前の戦争で一人のアイオンの少女がきっかけだ。

彼女はこちらの世界で言う悪魔の長だった。

彼女は人々との共存の為に話し合いを持ちかけ、抵抗することなく何度も何度も傷つきながらも共存を説いた。

しかし、人々は無抵抗の少女に対し何度も攻撃を加えていった。

ディーゴ側に居た拓也は彼女の行動に心を打たれ話し合いをするべきと仲間や上の人間を説得するために動いた。

だが、一人の力は虚しく状況を打破する事は出来なかった。

拓也はディーゴを抜け、彼女と話し合い行動を共にするようになった。

戦争で傷ついた人々を、そしてアイオンを助けるために……人々の行動にも少しずつ変化がみられた。

アイオンは人間の空想と違い、心の穏やかな種族なんだとわかってくれる人々が現れたのだ。

だが、そんな彼らをディーゴはゆるさなかった。

国に対する反逆、宗教への冒涇、人類の敵と行動する者を犯罪者としたのだ。

アイオンと行動を共にし始めた者達は帰る場所をうしなってしまった。

そして、拓也と彼女はダブルという組織を作った。

彼らにとつての帰る場所、新しい故郷となれば良い。そういう意味を込めて新しい街を作りひっそりと暮らしていく事を決めたのだ。しかし、ディーゴはこれに対して恐怖した。

ただでさえアイオンの力に恐怖していたのに、さらに彼らに賛同する人々まであらわれたため抵抗する数千の兵力が増えたと勘違いしたのだ。

そして……。

彼らは核兵器を使用した。

彼女は初めて心を交わした人間達、そして拓也を守るために全ての力を使い、被害を最小規模に抑えたのだ……まさしく命をかけて。

「み……みんなを守って……い、いつか……世界中の人々にわかってもらえるとうれしいな……」

「ああ……、そうだな……きつとわかってもらえるさ」

小さな体を優しく抱しめ、涙を堪え必死に笑顔を作った。

「拓也……、貴方にとって……負担になって……しまう……かもしれないけど……」

「大丈夫だから、俺が必ずみんなを守るから……だから……少し休め」

彼女はにっこり微笑んだ。

そして、右手を俺の胸に当てて小さく呟いた。周りに聞こえない声で…

「私の名前は、メフィル・ルシファード・サタン…私の心はいつまでも貴方と供に…」

その言葉と同時に彼女は青く光り始めた。

「メフィっ！」

「拓也…私の名前をわすれないで…いつも貴方のそばにいるから」

それが彼女の最後の言葉だった。

それから俺はダブエルの為に、アイオンの為に行動を起こした。

メフィルの残してくれた力を使って彼らを守り続けた。

理由…（後書き）

小説って難しいですね…

色々内容を考えてその場でやっているので中身がふわふわしちゃってます。

こんなのどうか？みたいなのが合ったら色々意見頂けるとうれしいかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3859u/>

真の聖戦戦争

2011年10月9日09時47分発行